

令和元年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

令和元年5月28日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表予定は令和元年6月25日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	葉いもちの感染量はやや少ないと予想されます。余り苗は直ちに処分してください。オリゼメート粒剤を使用する場合、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。 斑点米カメムシ類の発生時期は早く、発生量は平年並～やや多いと予想されます。水田除草剤を適切に使用しホタルイ類やノビエの発生を抑えるとともに、農道・畦畔や休耕田の除草を行ってください。
小 麦	赤かび病の発生量は平年並と予想されます。1回目（開花始期）の防除を行っていない場合、直ちに防除してください。
大 豆	タマナヤガの発生量はやや少ないと予想されます。耕起前に雑草が多かったほ場や例年被害がみられるほ場では、薬剤による防除を行ってください。
野 菜	ねぎ（夏どり）では、べと病の発生量は平年並と予想されますが、予防や発病初期の防除に努めてください。 キャベツ（初夏どり）ではモンシロチョウ、ヨトウガの発生量がやや多いと予想されます。薬剤防除は防除効果が高い若齢幼虫期から行ってください。 えだまめでは、ツメクサガの発生量がやや多いと予想されます。幼虫の発生初期に薬剤防除を行ってください。

果 樹	<p>りんごの病害では県北部でモニリア病（実ぐされ）が多く、黒星病がやや多いと予想されます。モニリア病は実（株）ぐされを摘み取って焼却するか土中に埋めましょう。黒星病は防除対策情報第2号を参照してください。</p> <p>なしでは、ナミハダニの発生が多いと予想されます。不要な徒長枝は早めに剪去し処分してください。なお、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布してください。</p>
-----	--

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	葉いもち	全県	やや早い	—	やや少ない
	ばか苗病	全県	—	少ない	少ない
	イネミズゾウムシ	全県	早い	—	やや少ない
	イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	全県	やや早い	—	やや少ない
	イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	全県	—	—	少ない
	斑点米カメムシ類 アカスジカスミカメ アカヒゲホソミドリカスミカメ	全県	早い 早い	— —	平年並 やや多い
	フタオビコヤガ (イネアオムシ)	全県	—	やや少ない	少ない
小 麦	赤かび病	全県	早い	—	平年並
	うどんこ病	全県	—	—	やや多い
大 豆	タマナヤガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	やや多い
ね ぎ	べと病	全県	—	平年並	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	—	少ない
キャベツ (初夏どり)	菌核病	全県	平年並	—	やや少ない
	コナガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	モンシロチョウ	全県	—	やや多い	やや多い
	ヨトウガ	全県	—	平年並	やや多い
えだまめ	べと病	全県	—	—	平年並
	ネキリムシ類 (タマナヤガ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ツメクサガ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	やや早い	—	やや少ない
	モニリア病	県北部	—	多い	多い
		県中央部・県南部	—	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	—	やや多い	やや多い
	炭疽病	全県	やや早い	—	平年並
	輪紋病	全県	やや早い	—	平年並
	シンクイムシ類	全県	—	—	やや少ない
	ナミハダニ	全県	—	やや少ない	平年並
	ハマキムシ類	全県	早い	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類	全県	—	平年並	やや多い
	キンモンホソガ	全県	早い	—	やや少ない
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	多い
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	多い	やや多い
ぶどう	べと病	—	—	—	やや少ない
	芽枯病	県南部	やや早い	やや少ない	やや少ない
	灰色かび病	県南部	—	平年並	やや少ない
	晩腐病(花蕾発病)	県南部	—	—	やや少ない
	チャノキイロアザミウマ	県南部	やや早い	—	やや多い
飼料作物	アワヨトウ	全県	早い	多い	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感染時期 [全般発生開始期]	感 染 量
1. 葉いもち	やや早い (前年よりやや早い)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている(－/±)。
- イ、育苗期巡回調査における育苗施設内外における稲わら、籾殻の確認地点率はやや低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。
- イ、育苗期いもち防除をしなかった場合、いもち病の持ち込みや早期の伝染のおそれがあるため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。
- ウ、乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。
- エ、オリゼメート粒剤を使用する場合は、移植栽培では6月15日頃(12～18日)、直播栽培では6月23日頃(20～25日)に2kg/10a散布する。
- オ、箱施用剤又は側条施用剤を使用していないほ場では感染苗の持ち込み等により早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病した場合は、直ちにオリゼメート粒剤を散布し、その15～20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病した場合は、オリゼメート粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤又はノンブラス剤)の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ばか苗病	－	少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、育苗期巡回調査における発病箱率は0% (平年2.1%)、発病地点率は0% (平年15.2%)でいずれも低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発生時期 [本田侵入盛期]	発 生 量
3. イネミズゾウムシ	早い (前年よりやや早い)	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(－/+)
- イ、水田内への越冬後成虫の侵入密度盛期と関係のある有効積算温度91日度の到達度は、5月25日

現在80.2%（平年15.7%）であることから侵入時期が早いと推定される（－/ ）。

ウ、予察灯調査における第1世代成虫の誘殺数は前年並であったことから、越冬量はやや少ないと推定される（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月上旬に越冬後成虫が株当たり0.3頭（被害株率90%以上に相当）以上であった場合は、シクロサルU粒剤2又はトレボン粒剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	やや早い (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（－/±）。

イ、前年の発生量はやや少なく、被害程度はやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、産卵盛期（6月上～中旬）の卵塊数が1株当たり0.5を超える場合は、ふ化盛期（6月中旬）に茎葉散布剤で防除する。ただし、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性が確認されている地域では、トレボン粉剤DL又はMR、ジョーカー粉剤DLを用いる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ) (第2世代)	－	少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /－）。

イ、5月下旬の巡回調査(沿岸部19地点)における株当たり産卵数は前年より少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、スタウトパディート箱粒剤、ルーチンデュオ箱粒剤、ルーチンパンチ箱粒剤、ブイゲットグラインドオンコル粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、プリンス粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤、パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤を育苗箱に施用した場合とガードナーフロアブルを育苗箱にかん注した場合は、その後の防除の必要はない。

イ、今後移植するほ場や直播ほ場では第2世代幼虫の発生に注意する。6月中旬の産卵状況を確認し、産卵数が多い場合は幼虫発生初期に水面施用剤又は茎葉散布剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 斑点米カメムシ類 (越冬世代成虫) アカスジカスミカメ アカヒゲホソミドリカスミカメ	早い (前年並) 早い (前年並)	平年並 (前年より少ない) やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（-/±）。
- イ、牧草地すくい取り調査におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代幼虫の初確認日は平年並、越冬世代成虫の初確認日は早く、幼虫の発育は早い（-/ ）。
- ウ、前年成熟期（9月中旬）に行なった水田内すくい取り数は、アカスジカスミカメは平年並（ /±）、アカヒゲホソミドリカスミカメは多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、6月上旬から繁殖地となる農道・畦畔、休耕田等の除草を地域でまとまって行う。
- イ、水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行う（5月10日発表の防除対策情報第1号を参照）。雑草の生育状況を確認し処理時期が遅れないようにする。
- ウ、一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤、少量拡散型粒剤は藻類・表層剥離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層剥離の発生前から発生初期までとする。
- エ、一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. フタオビコヤガ（イネアオムシ） （第1世代）	—	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ない、日照時間は多いと予報されている（ /-）。
- イ、育苗期巡回調査における育苗施設内の成虫数はやや少ない、卵確認地点率はやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、フェルテラ箱粒剤、プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤のいずれも施用せず、食害が多く、実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチューンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DL、MR、ジョーカーEWのいずれかを散布する。

8. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
縞葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ （2回発生地帯の 第1世代）	—	—	少ない	防除の必要なほ場は少ないと見込まれる。

B 小麦

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 赤かび病	早い (－)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている (－/±)。
- イ、各地域振興局管内の定点調査によると出穂期は、秋田 (銀河のちから) 5月10日 (平年5月10日) で平年並であった。仙北 (ネバリゴシ) 5月19日 (平年5月22日)、平鹿 (ネバリゴシ) 5月18日 (5月22日) でやや早かった (－/)。
- ウ、前年収穫期の発生量は平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルで防除する。その後7～10日後に2回目の防除をする (下記イ、の項参照)
- イ、2回目は、1回目の防除から7～10日後にトップジンM水和剤、トップジンM粉剤DL、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかで防除する。
- ウ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	－	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている (/+)。
- イ、県南部の一部ほ場で多発が確認されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本病は赤かび病と同時防除が可能である。
- イ、赤かび病防除適期以前に薬剤散布している場合は、使用回数に注意する。
- ウ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

3. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
さび病	－	－	平年並	赤かび病との同時防除が可能である。

C 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. タマナヤガ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は38頭（平成66.0頭）でやや少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（ / + ）。

イ、5月5半旬のえだまめの巡回調査における50茎当たりの幼虫数は0頭（平成0.3頭）で平年並であった（ / ± ）。

ウ、5月5半旬のえだまめの巡回調査における食害茎率は0%（平成0%）で平年並であった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ツメクサガは年2回発生し、第1世代幼虫は6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するため、ほ場をよく観察する。

イ、幼虫の発生初期にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。

ウ、老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

D ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. べと病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ / ± ）。

イ、5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平成0%）で平年並であった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので予防や発病初期の防除に努める。

イ、展着剤を加用した薬液を、葉先から株元まで十分付着するように散布する。

ウ、発病株を確認した場合は、治療効果のあるリドミルゴールドMZやアミスター20フロアブルを散布する。

エ、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /-）。

イ、前年の発生量はやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県北部で発生しやすい。

イ、多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等を散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。

ウ、発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげ等の発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤等を散布する。

F キャベツ（初夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 菌核病	平年並（前年より早い）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（±/±）。

イ、前年の初夏どり（収穫期）での発生量はやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ネクスターフロアブル、ロブラール水和剤、等を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. コナガ	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける4月5半旬～5月5半旬のフェロモントラップの誘殺数は66頭（平年183.6頭）で少なかった（ /-）。

ウ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.03頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低いときは、遅効性だが残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。

イ、生育期から結球期にかけて発生が多くなってきたら、ネライストキシン系剤、アフーム乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5等を散布する。

なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. モンシロチョウ	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（ /+）。

イ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.04頭（平年0.02頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. ヨトウガ（第1世代）	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける5月2～5半旬のフェロモントラップの誘殺数は1頭（平年0.8頭）で平年並であった（ /±）。

ウ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作を避け、排水対策を行う。また、種子伝染するので健全種子を用いる。密植や過繁茂を避け、風通しを良くする。被害残さを適切に処分する。

イ、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。

ウ、フェスティバルC水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル、レーバスフロアブルを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ネキリムシ類（タマナヤガ）	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は38頭（平年66.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前には場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、タマナヤガは長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。また、沿岸部での被害が大きくなることがあるのであわせて注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ツメクサガ	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（ /+）。

イ、5月5半旬の巡回調査における50茎当たりの幼虫数は0頭（平年0.3頭）で平年並であった（ /±）。

ウ、5月5半旬の巡回調査における食害莖率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本種は年2回発生し、第1世代幼虫は6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するため、ほ場をよく観察する。
- イ、幼虫の発生初期にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。
- ウ、老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

H りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点落葉病	やや早い（前年より早い）	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /± ）。
- イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月14日で平年より3日早かった（ - / ）。
- ウ、前年の発生量はやや少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤、ユニックス顆粒水和剤47、ロブラール水和剤のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力が低下している園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI（ストロビルリン系）剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。
- エ、オキシラン水和剤、キノンドー水和剤40、キノンドーフロアブル、シトラノフロアブル、ドキリンフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ポリオキシシO水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花20日後頃まで使用しない。
- オ、ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花25日後頃まで使用しない。
- カ、ストライド顆粒水和剤はサビ果を発生させるおそれがあるため落花30日後まで使用しない。
- キ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25はサビ果を発生させるおそれがあるため落花40日後頃まで使用しない。また、千秋、玉林では果実色に障害を生じるおそれがあるため7月上旬まで使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病 （実ぐされ）	—	県北部 多い（前年並） 県中央部・県南部 やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、5月中旬の巡回調査における花ぐされ発病果そう率は県北部では0.7%（平年0.1%）で高かった（ /+ ）。県中央部・県南部では0%（平年0.1%）でやや低かった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、実（株）ぐされは翌年の伝染源になるため、見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 黒星病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。

イ、5月中旬の巡回調査における発病果そう率は0.0%（平年0.1%）で平年並、発病地点率は4.5%（平年0.9%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、5月28日発行の防除対策情報第2号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 炭疽病	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月14日で平年より3日早かった（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある場合は伐採する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
5. 輪紋病	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月14日で平年より3日早かった（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、枝幹のいぼ病斑は削り取りトップジンMペーストを塗布する。本剤の使用回数は3回以内なので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、横手市予察ほにおける越冬世代成虫の初誘殺は、5月6半旬（平年6月1半旬）で早かった（- / ）。

イ、前年秋期の被害果率はやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するため、産卵状況に注意し適期に殺卵剤を散布する。

ウ、合成ピレスロイド剤の散布時期は、県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

エ、交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。

オ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

カ、サイアノックス水和剤、スプラサイド水和剤、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるため高温時や衰弱樹に散布しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. ナミハダニ	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+ ）。

イ、5月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）でやや少なかった（ /— ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

ウ、カネマイトフロアブルにアリエッティC水和剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にカネマイトフロアブルを希釈する。

エ、マイトコーネフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にマイトコーネフロアブルを希釈する。また、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるため、マイトコーネフロアブルとスミチオン水和剤40は混用しない。

オ、ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

カ、スターマイトフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にスターマイトフロアブルを希釈する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
8. ハマキムシ類（第1世代） （リンゴコカクモンハマキ） （リンゴモンハマキ）	早い（—）	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（—/ ）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花期は5月14日で平年より3日早かった（—/ ）。

ウ、5月中旬の巡回調査における寄生果そう率は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /— ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、リンゴコカクモンハマキの防除時期は、県北部が6月5半旬～6半旬、県中央部・県南部が6月4～5半旬と見込まれる。フェロモントラップ利用園では、誘殺最盛期の2週間後に防除剤を散布する。

イ、防除剤は、エクレシルSE、オリオン水和剤40、サムコフロアブル10、ダズバンDF、ディアナWDG、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。ただし、ダズバンDFのリンゴコカクモンハマキ幼虫に対する効力が低下している地域では同剤を使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。

イ、県内5か所の防除適期決定ほにおける5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数は53頭(平年62頭)で平年並であった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期や飛来数は地域によって異なるため、飛来状況をよく観察する。特に山間部の園地では注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤などを散布する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため総使用回数に注意する。

エ、スプラサイド水和剤とスミチオン水和剤40は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40は薬害(黄変落葉)を発生させるおそれがあるため高温時や衰弱樹に散布しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
10. キンモンホソガ(第2世代)	早い(前年より早い)	やや少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/)。

イ、果樹試験場(横手市)におけるふじの落花期は5月14日で平年より3日早かった(-/)。

ウ、前年秋期の発生量はやや少なかった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除時期は県北部が6月3～4半旬、県中央部・県南部が6月2～3半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	平年並	やや多い	向こう1か月の気温が高いと予報されているため、発生量はやや多いと予想されるが、防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

I なし（日本なし）

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。
- イ、5月中～下旬の巡回調査における発病果そう率（芽基部病斑）は0%（平年0.2%）、発生地点率は0%（平年9.1%）でいずれもやや低かった（ /-）。
- ウ、前年9月の巡回調査における発病果そう率率は高かった（ /+）

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害部位は除去し、園外へ搬出し処分する。
- イ、防除剤の散布間隔は10日とする。降雨が続くと予想される場合又は発生の見られる園地では、散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。
- ウ、有袋栽培の場合は、防除剤を散布した後の袋かけを速やかに行う。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。
- イ、5月中～下旬の巡回調査における発病果そう率は0.04%（平年0.06%）、発病果率は0%（平年0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病の多い品種は南水、八雲である。
- イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ、早期に袋かけを行う。袋かけ前の防除を徹底する。
- エ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は発生の見られる園地では散布間隔を7日とする。
- オ、多発条件下では、ポリオキシソルボン水和剤を主剤に加用するか、ポリキャブタン水和剤又はベルクガード水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシソルボン剤の使用回数は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	やや早い (前年よりやや早い)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、3月下旬～4月上旬を除く、3月～5月中旬の気温は概ね高く推移した（- / ）。

イ、前年の収穫期の被害果率は平年並であった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するため、産卵状況に注意し適期に殺卵剤を散布する。

ウ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

エ、合成ピレスロイド剤の散布時期は、県北部が7月上～中旬、県中央部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

オ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ナミハダニ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ / + ）。

イ、5月中～下旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.001頭（平年0.008頭）で平年並であった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ / + ）。

イ、前年秋期の越冬トラップ調査におけるクサギカメムシの越冬数は3.6頭/地点（平年6.6頭/地点）でやや少なかった（ / - ）。

ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数は83頭（平年32.0頭）で多かった（ / + ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。
- イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、合成ピレスロイド剤は6月下旬以降に使用する。
- ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期 (感染時期)	発生量 (感染量)		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
輪紋病	平年並	—	平年並	防除剤の散布間隔は10日とするが、降雨が続くと予想される場合は7日とする。
リンゴハダニ	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
ハマキムシ類	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ユキヤナギア ブラムシ)	—	やや少ない	やや少ない	シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。

J ぶどう

病害虫名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている (/-)。
- イ、前年9月の巡回調査における発病葉率が2.2% (平年4.5%) と平年並であったことから、越冬量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、アリエッティ水和剤は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱のおそれがあるため、落花7日後までに使用する。
- イ、ホライズンドライフフロアブルは果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブルは果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱のおそれがあるため、散布時期に注意する。
- ウ、Q o I 剤、Q i I 剤、カルボン酸アミド剤又はシモキサニルを含む農薬は年間1～2回の使用とし、同一系統薬剤を連用しない。特に、Q o I 剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除剤として使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
2. 芽枯病	やや早い (－)	やや少ない (－)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている (/－)。

イ、果樹試験場(横手市)における展葉は、キャンベル・アーリーが5月5日で平年並、巨峰が5月10日で平年より3日早かった (－/)。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病芽率はキャンベル・アーリーで0.3% (平年2.3%)、巨峰は0% (平年0.4%) でいずれもやや低かった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病枝は剪去し、適切に処分する。

イ、開花期間に多雨が予想される場合は来春に多発するおそれがあるため、オーシャイン水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを開花前に散布する。

ウ、上記の剤は耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の使用回数を年間1～2回とし、連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 灰色かび病	－	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている (/－)。

イ、5月中旬の巡回調査における発病葉率はキャンベル・アーリー、巨峰いずれも0% (平年0%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前(袋かけ前)に払い落とす。

イ、発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、適切に処分する。

ウ、花穂の防除が重要であることから、開花前と落花後の散布間隔を10日以上空けない。

エ、アミスター10フロアブル、ストロビーフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。

オ、カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害(葉の白化)が発生するおそれがあるため混用しない。

カ、開花直前にカンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、ネクスターフロアブルのいずれかを散布する。

キ、落花直後にアミスター10フロアブル、カンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、ネクスターフロアブルのいずれかを散布する。

ク、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。

ケ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ～カに記した剤は耐性菌出現回避のため、使用回数は各剤1回とし、かつ、同一系統薬剤の連用は避ける。
 コ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがあるので注意すること。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 晩腐病（花蕾発病）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（ / - ）。
 イ、前年の収穫期の巡回調査における発病果房率は、キャンベル・アーリーが0.1%（平年0.6%）で平年並、巨峰が0%（平年1.3%）でやや低かったことから、越冬量は平年並と推定される（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病花穂は摘み取り、適切に処分する。
 イ、笠かけ、袋かけは防除効果が高いのでできるだけ早く始め、遅くとも7月中旬までに終える。
 ウ、開花前にジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを散布する。
 エ、落花直後にアミスター10フロアブル、ジマンダイセン水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。
 オ、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。
 カ、アミスター10フロアブル、ストロビーフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
 キ、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除く上記の剤は、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の年間総使用回数を1～2回とし、連用は避ける。
 ク、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがある。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. チャノキイロアザミウマ	やや早い（-）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ - / + ）。
 イ、前年の巡回調査において、キャンベル・アーリーの収穫前（8月下旬）の被害果房率は0%（平年0.2%）で平年並、巨峰（9月上旬）の被害果房率は0%（平年2.2%）とやや低く、越冬量は平年並と推定される（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除薬剤としてダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤、ディアナWDG、合成ピレスロイド剤（アグロスリン水和剤、アディオオン水和剤、スカウトフロアブル、バイスロイドEW）などを散布する。

イ、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。
 ウ、合成ピレスロイド剤の年間使用回数は1～2回とする。

K 飼料作物

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. アワヨトウ	早い（－）	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、初誘殺は能代市の糖蜜トラップにおいて5月2半旬（平年6月1半旬）で早かった（－/－）。
 由利本荘市では5月4半旬まで誘殺は確認されていない。
 イ、5月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は、能代市13頭（平年0.6頭）で多かった（-/+）。
 ウ、5月2半旬の飛来による幼虫の発生は、5月5半旬まで確認されていない（-/－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和元年5月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（5月25日～6月24日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	20%	70%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	30%	50%

(3) 気温経過の各階級の確率

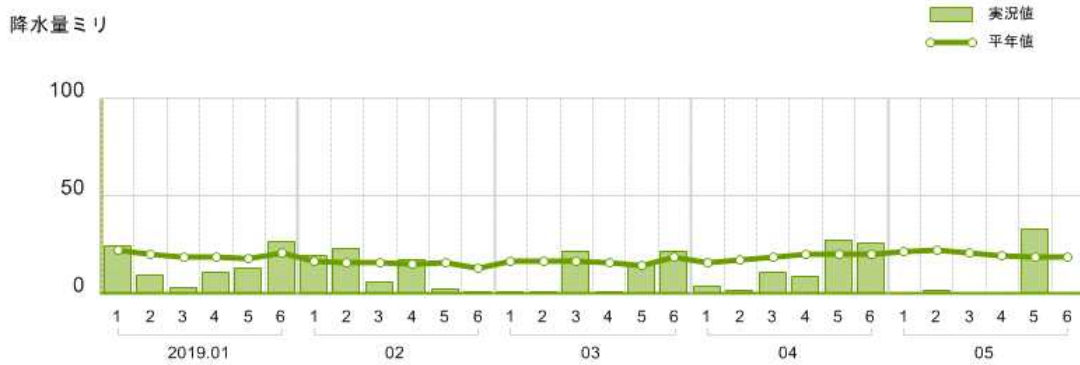
	低い	平年並	高い
5/25～5/31	10%	10%	80%
6/1～6/7	10%	30%	60%
6/8～6/21	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

2019年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

令和元年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。